

きずな

いのち。つながるマガジン Vol.14
2024.3

浄土の真宗とす

はからなむらゝのちんちん



濁世しよくせに生きる

— 立教開宗の願いを聞く —

第4期

「御同朋の社会を

めざす運動」を

振り返って

「基幹運動」が「御同朋の社会をめざす運動」と名称変更されて、第4期が終了します。第4期より運動に全ての教団人が関わることを目的とし、各組の役職任期に合わせて期間が4年に変更されました。重点プロジェクトを設定し課題を通してそれぞれの地域でこれまでのあり方を振り返り、具体的な取り組みを構築しながら、人と人との関わりを広げ、浄土真宗の教えにかなう生き方を学びました。

第4期は、Covid-19（新型コロナウイルス感染症）の蔓延により、3密（密閉・密集・密接）を避ける等の感染対策によって総会・研修会・行事の開催が制限され、交流の場がなくなり、運動継続も困難を極めました。

2012年に第2次安倍政権が誕生して以降、東京オリンピックの招致に始ま

り、森友学園・加計学園問題においては権力を濫用し、メディア・検察・裁判官まで服従させる政治が行われ、真実は隠され、弱い立場にある人の声は切り捨て、自己保身のためには何でもすることが罷り通る国家となりました。閣議決定でこれまでの認識を覆し、国会での丁寧な説明もなされないという状況が現在も継続されています。原発再稼働、辺野古の埋め立て、旧統一教会問題、キックバック問題、また、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルによるパレスチナへの無差別殺戮など、まさに「濁世」そのものを見せつけられています。

102年前の1922年、全国水平社が創立され、差別に苦しむ人たちが親鸞聖人の教えをもとに、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と立ち上がり、多くの被差別少数者との連帯が始まった矢先に関東大震災が起きました。10万人超が死亡し340万人が被災した大災害の中で、東京や横浜などで「社会主義者及び鮮人の放火多し」「不逞（ふてい）鮮人暴動」「井戸に毒薬を入れる」などの流言蜚語が警察官憲を出所として軍隊やマスメディアに拡散し、各地で警察の指導のもと組織された自警団は、官憲と共に多数の朝鮮人や中国人を虐殺しました。また、大正デモクラシー下で活発と

なった労働運動・民権運動・女性運動などの社会主義者への弾圧や地方出身者への虐殺も行われました。しかし、政府はこれらの事実から目を逸らし、歴史を隠蔽し続けています。この後、日中戦争・太平洋戦争に突き進むことになりました。

2022年12月のテレビ番組でタレントのタモリさんは、2023年がどのような年になるかと問われ、「新しい戦前になるのではないかと語りました。その指摘は2024年の今、果たして杞憂きゆうであったと言えるのでしょうか。

これから第5期の運動計画が策定されます。歴史を省みながら、私たちは何を守るのかを問わずにはおれません。煩惱具足の凡夫、何をしでかすのか判らないお互いとして、み教えに問い、聞き、語り、自己決定をしていく、水平の人間関係を構築して、一人も漏らすことのない本願のはたらきに生きる「御同朋の社会をめざす運動」をすすめていきましょう。（中島清志）

※「鮮人・不逞鮮人」は差別語ですが、事件の差別性・排他性に鑑み、当時の表現をそのまま使用しました。



仏法に 立ちかえる



「この先、日本は戦争をしない国でい

られるだろうか？」戦争のニュースに触れるたび湧き上がる問いです。2022年2月ロシアがウクライナへ侵攻。2023年10月にはイスラム組織ハマスがイスラエルに大規模攻撃を仕掛けました。これらの争いは今も続いており、他人事と割り切れない危機感を覚えます。

私は昨年の夏、信越放送のテレビ番組「お寺と戦争と私」に出演しました。番組では、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、禅宗の各派が、明治から昭和の戦争にどのような関わったのかを取材しました。そのなかで、第二次世界大戦中に行われた真宗各派の代表者と軍との会談の内容を知りました。軍幹部の「兵士には、天皇陛下のために命を捨てよと教育しているが、戦死後の生命についてはどのような解釈を与えたらよいか」という質問に、真宗側は「真宗では、死して浄土に生まれ、更に還相回向を説く。死後の生命の説明は、真宗の教えが最も適切である」

と答えています。

この会談の記録からは、「お国のため」と頭では理解しながらも、どこか納得しきれない兵士たちをなんとか説得しなければならぬ、そんな状況が想像できません。戦争中、浄土真宗のみ教えは、命を守ろうという人間の本能を断ち切る後押しをしたのではないのでしょうか。

私はこの解釈に歪みを感じます。同時に、次々に戦争が起こっている今、この歪みと向き合わなくてはならないとも思えます。お念仏の道を歩む私たちは、約80年前の「戦時中」に戻らないために、そして、今起きている戦争の渦へ飛び込まないために、どこへ立ち返っていけばよいのか。やはり、仏法であり、親鸞聖人のお言葉ではないのでしょうか。

親鸞聖人は「世の中安穏なれ、仏法ひろまれ」というお言葉を残されました。私たちは常に「自分の思う通りに生きていきたい」と願う行動します。しかし、この思いこそ、自らの苦しみの種であり、争いのもとであるとお釈迦さまは説いています。仏法にであうということは、自己中心に生き、そのために自分自身を苦しめ、人との不調和も生み出すという自らの姿に気づいていくことです。多くの人が仏法にであい、自分の姿に気づいて立ち止まることができれば、戦争への一

線を越える前に、新たな道を見出すことができるのではないのでしょうか。一方で、仏法と向き合わせていただく自分の姿を振り返ると、迷ったり、サボったり、一人ではあまりにも心許なく感じます。浄土真宗には、ともにお念仏のみ教えをいただく仲間「御同朋・御同行」という繋がりがありません。今もすぐ隣にいてくださる御同朋・御同行と言葉を交わしながら、日本が戦争をしない国であり続けられるよう、一歩一歩進んでいきたいと思えます。

(小泉(海野) 紀恵)



信濃町稱名寺 石の鐘

親鸞聖人御誕生850年・ 立教開宗800年の意義

親鸞聖人(宗祖)は 架空の人物?

いまからおよそ100年前、親鸞聖人(以下宗祖)は後代に教団を形成していった人々によって生み出された「架空の人物ではないか?」との議論がありました。

明治以降、歴史研究も西洋的な実証的研究が推奨され、この議論は東京帝大史料編纂所で俎上にあがるようになり、1896年にはルター研究で有名な村田勤(むらた つとむ)が『史的批評・親鸞真伝』を刊行し、過去の親鸞伝は本願寺宗門内の史料が中心であって、『元亨釈書』(推古朝から元亨年間に至る700年余の僧侶の伝記、仏教の事跡等をまとめたもの)に「親鸞」の名前を確認できず、また宗門内の親鸞伝は後世の付会が多く客観性を欠くと指摘しました。これに続くように当時の歴史学の權威であった東京帝大教授の田中義成(たなか よしなり)と國學院大教授の八代國治(やしろくにじ)が聖人の歴史的実在を問題とする「親鸞抹殺(架空)論談話」を発表すると教団内はもとより世間的にも大きな動揺が広がりました。

しかし、1920年、東京帝大助教授の辻善之助(つじ ぜんのすけ)が『親鸞聖人筆跡の研究』を著し、宗祖親筆と

されているものが鎌倉時代のものであることが確認され、1921年には仏教大学(現龍谷大学)書記の鷺尾教導(わしおきょうどう)の調査によって本願寺の宝庫から、越後に住む宗祖の妻惠信尼公から京都で宗祖の身の回りの世話をした末娘の覚信尼公に宛てた書状(『恵信尼消息』)10通が発見され、その内容と宗祖の動向が合致したため実在したとの決着を見ました。

100年後にいる私たちには荒唐無稽にも感じる議論に思いますが、そもそもこの議論の背景には、宗祖が他の有名な歴史上の人物と違い、自らの生涯について自ら語り、書き残すことをされておらず、その伝記の多くは後世の人々の推定に過ぎないことがあります。

「歴史は勝者がつくる」との言葉がありますが、歴史上の英雄たちは、自らの実績を誇張して後世に伝え影響を遺そうと考えました。宗祖の伝記として正史的扱いを受けていた『御伝鈔』も教団を統制し拡大する為に宗祖の身分を誇張し、伝説的なもの(例えば熊野権現の話など)を利用して、宗祖の曾孫にして作者である覚如上人が宗祖と自らを権威づけようとした側面があることは否めません。そしてこのことが皮肉にも宗祖の実在を疑問視される要因となりました。



宗祖がその生涯で顕らかにされたのは？

宗祖は、自らがどのような「生き方」をしたのか、何を「成した」か、ましてや自らが宗派として『浄土真宗』を開いたとは仰おしっていません。

宗祖が師である法然聖人を讃えられた智慧光のちからより

本師源空あらはれて

浄土真宗をひらきつつ

選択本願のべたまふ

のご和讃に顕らかなように、宗祖は『浄土真宗』という語を宗派の名ではなく、『法然聖人から伝えられた真実の教え』として表現されました。

また、『浄土真宗』立教開宗の書として仰がれてきた『顕浄土真実教行証文類』（略して『教行信証』＝浄土真宗の根本の聖典であるため崇敬の念を表して本願寺派では『御本典』とも言われ、宗祖が草稿を完成されたとする元仁元年（1224年）4月15日が立教開宗の根拠とされています）には

本師源空明仏教

憐愍善悪凡夫人

真宗教証興片州

選択本願弘悪世

（本師源空【＝法然聖人】は、仏教をあら

きらかにして、善悪の凡夫人を憐愍せしむ。真宗の教証、片州に興す。選択本願悪世に弘む）とあり、聖人にとつて『浄土真宗』とは、言うなれば「生きる依り処」としての「宗」すなわち「私の宗教」＝「私の中心となる教え」を顕らかにされました。

800年を超えた問い掛け

宗祖は「教行信証」の後序に

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す

と述べられています。「心を弘誓の仏地に樹て」とは、自分の都合の良いものを見方を離れて立ちあがる決意であり、根を張った樹木が風雨に曝されても倒れないように、確かな依り処に根をおろした心は倒れることはないと思ふことを頂くことです。また「海」は、様々な川が流れ込み、それらをすべて受け入れています。清らかな川の水も濁った川の水も全て流れ込み一味となります。「念を難思の法海に流す」とは、命の長短・善悪を問わず、あらゆる人生を迎えとつてくれる大きな世界を表して下さっています。

このご文は800年の時を超え、宗祖から「自分の現在地を本当に知っていますか？」・「人生の行き先が分かっていますか？」・「分からないままに世間の風潮

に流されてはいませんか？」・「分かったつもりになって、実は当てにならないものを依り処にはしていませんか？」との問い掛けのようにも感じます。

自分の考え方が正しいか、誤っているかを問い直すことは難しいことです。広やかな大きなはたらきに出遇つて初めて、自分が狭いもの見方に執われていたことを知らされます。「私の宗教」が問われる時、本当の自分（私の中に潜む排他性・差別性・自己中心性）に否応なく出遇います。宗祖は自らの「依り処」を顕らかにされた上で「阿弥陀様の仰せに順つてまいりましょう。お浄土を依り処としましょう」と本物の宗教に出遇つて下さいと今ご催促下さっています。

（木賣慈教）



親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要参拝風景

次代の仏事を展望して

教学研修部会

寺尾拓路

高い感染力を持つて瞬く間に世界中に蔓延した新型コロナウイルスは、私たちの生活様式に大きな変化をもたらしました。感染の拡大防止が最優先事項とされ、多くの人が一堂に会する場面は徹底的に避けられるようになりました。その傾向は、葬儀や法事などの仏事についても例外ではなかったようです。

ここ数年間で、新聞紙面のいわゆる「お悔み欄」に「家族葬で行う・近親者のみで行う」といった表現が目立つようになつたとお気づきでしょう。一カ寺を預かる住職として法務に携わる中で、「葬儀や法事の簡略化・少人数化」は極めて顕著だと感じています。無論、感染拡大時において、これは当然の措置だったのかもしれない。感染予防を考慮して、やむを得ず参列や焼香を控えたという人も大勢おられることでしょう。しかし、懸念をしているのは、この風潮がコロナ禍収束後にまで続いていくのではないかとことです。

「葬儀や法事の簡略化・少人数化」の

是非を問うつもりはありません。家族の形や親戚づきあいの在り方、地域社会との関わり方などは、時代とともに間違いなく変化していくものですから。ただ、コロナ禍という異常事態によつて生じた不規則で大きなうねりに、無自覚のうちに巻き込まれることだけは避けねばなりません。

教学研修部会は、実践運動長野教区委員会内にあつて、御同朋の教学を構築するため、各種研修会の充実と、儀礼・法要の課題克服とを図る部会です。当部会でも御多分に洩れず、この数年間はコロナ禍に苛まれて思うような活動はできませんでしたが、オンラインを併用した研修会を開催するなど、可能な範囲内で先を見据えた取り組みをしてまいりました。

目下、部会を挙げて取り掛かっているのは法事用のリーフレットの作成です。前述の通り、コロナ禍の影響で葬儀や法事などの仏事は大きく様相を変えています。次代の仏事を展望したとき、葬儀や

法事が本来的に持つ意義が徐々に失われ、儀礼が形骸化してしまつたのではないかと危機感が、当部会においてリーフレット作成に踏み出す大きな要因となりました。

このリーフレットは、法事の折にご参列の方々にお配りいただくことを想定しています。法事に参列された方がご覧になったとき、住職の法話と合わせて、「今日の法事は私にとってどういう意味を持つものなのか」をじっくり味わつていただける内容となるよう、鋭意編集作業を進めています。完成のあかつきには、多くのご寺院でご活用いただければ幸いです。

来年度は、教区内すべての組において、門徒推進員養成連続研修会（連研）が再開される見通しです。また、種々の研修会については、感染症の流行状況に留意しつつも、可能な限り従来通りに開催できるように努めてまいります。今後とも、教学研修部会の活動にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

学びからの飛躍をめざして

社会問題部会

渡 邊 英 晴

社会問題部会の参加事業の一つとして、毎年長野県下にて執り行われている『部落解放研究集会』があります。昨年の暮れには60回目という節目の年を迎え、上田市・丸子文化会館に於いて開催されました。私自身、第54回目からたびたび参加をしてはおりますが、研修後は何かしら私自身に出来ることがあればという心持ちにはなるのですが、なかなか活動するという域まで出来ていないのが現状であります。ただ差別の現実を知って、それを共有するということだけでも、大切なことではないかと思っております。

今回の講演内容で、私が関心を持って改めて知ることが出来た課題は、東京地裁への提訴から7年以上が過ぎ、全国の被差別部落の所在地情報などの一覧や、「部落解放同盟関係人物一覧」と称する個人情報一覧の電子データをインターネット上に公表し続けていた鳥取ループ

(ブログの名前)・示現舎(川崎市の出版社)に対する『全国部落調査』復刻版事件裁判に於いて、2023年6月28日、東京高裁は一番原告の主張を大幅に認める画期的な判決を言い渡したことであります。その判決内容は①差別されない権利、②差し止め範囲の拡大、③プライバシー権の修正、④救済対象の拡大、⑤部落差別の現状と深刻さの事実認定であります。裁判例で初めて、原告らが求めていた「差別されない権利」を実質的に認める控訴審判決を言い渡したことが要になります。

2016年に「部落差別解消推進法」が公布・施行されましたが、今もなお差別的な発言や結婚における差別、同和地区に関する行政への問い合わせなどの差別事象が発生しています。またネット上では、被差別部落に対するデマや偏見、差別的情報が拡散・蓄積

され続け、そのネット上で部落差別や差別扇動が放置されることによって、現実社会での差別がエスカレートしている事実も見受けられます。一般社団法人部落解放・人権研究所による『差別禁止法』の制定を求める動きが進んでいます。これは差別は社会的に許されないことであり、差別の禁止は社会の共通のルールであるということを示したものであります。現状日本は世界の主要各国において、差別禁止法のような制度や、国内における人権機関の設置状況も遅れていると言わざるをえません。

何もしなければ何も変わらない。宗祖親鸞聖人のお心でもある「御同朋・御同行」の精神に省みて、差別のないすべての人がともに暮らしやすい社会づくりにむけて、微力ながら邁進していきたい所存です。

歴史と向き合う

—千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要団体参拝報告—

行事広報部会 滋野顕慈

1981年から毎年9月18日に修行

されている千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要は、今年度で第43回目となります。長野教区では行事広報部会主催のもと、第1回目より継続して団体参拝を行ってまいりました。このたびは非戦・平和への取り組みとともに、2023年が関東大震災より100年を迎えたことから、震災により多くの命が失われた地であり現在は追悼施設となっている都立横綱町公園と、日本と韓国・朝鮮との交流の歴史館である高麗博物館を訪ね、震災に関わる歴史について学びを深めてきました。

隠蔽された虐殺事件

関東大震災については、その規模や被害の状況など多くの方が知るところであります。昨年は発生より100年が経過し、新聞やニュース等で多くの特集が組まれましたが、防災意識の向上を図る内容が中心であり、その歴史に目を向けたものは少なく、あまり知られていません。今回伺った高麗博物館では関東大震災朝鮮人大虐殺をテーマとした企画展を行っ

ていました。

この事件は震災の混乱のなか、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」「朝鮮人が放火した」などの流言蜚語が新聞報道により拡大し、これらの悪質なデマに市民が惑わされ、民間で組織された自警団、軍隊、警察により多数の朝鮮人や中国人が虐殺された歴史的事実であり、その犠牲者は震災の死者・行方不明者約10万5千人の1/3数%と言われています。なお、現在も事件の真相究明が求められていますが、政府は「記録が見当たらない」として調査を行っていません。しかしながら、企画展では虐殺が描かれた水彩画や絵巻、各証言資料が数多く展示され、政府の見解に大きな矛盾を感じるとともに、いわれなく命を奪われただけでなく生きた証さえも奪われた方々のことを思うと、いたたまれない思いになりました。

この事件を通して私たちは何を考えていかなければならないのでしょうか。過去の出来事、私には関係のない問題と捉えるならば、そこで考えは止まってしまいます。確かに非当事者である私たちに

とって過去の歴史と向き合うことは非常に難しいことですが、忘れてはならないのは様々な過去の歴史の上に今の現実社会が成立しているという視点です。高麗博物館の会報にこのような言葉がありました。

「死者の尊厳に無関心な社会は、生者の人権も顧みなくなるでしょう」

この言葉は、過去の歴史に目を向けない社会の有り様が、知らず知らずのうちに私のなかの人権感覚を欠如させ、差別意識を形成させていくことを示唆しているのではないのでしょうか。非常に厳しい指摘であろうかと思えます。

私たちの教団にも、戦争へ積極的に協力し、また部落差別を温存・助長してきた「加害の歴史」があります。このたびの研修参拝を通して、被害の歴史に思いを巡らすだけではなく、加害の歴史を検証し厳しい眼差しで問い直していく必要性を改めて教えていただきました。そしてその反省の積み重ねが、同じ過ちを繰り返さないための糧となり、取り組みを進めるための原動力となることを感じています。

行事広報部会の活動がその一助となるよう、これからも取り組みを進めてまいります。